

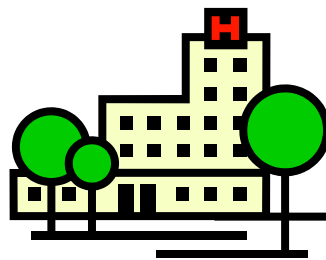
到達目標の細項目作成プロセスの例示について

到達目標設定の際に考慮する項目等の例

項目	考慮すべき内容の例
施設の規模・機能	施設の理念は何か 地域における施設の役割は何か 等 [・病床数 ・病床区分（一般病床・療養病床・精神病床・感染症病床等） ・病院の機能（特定機能病院・地域医療支援病院等）・患者の平均在院日数 ・入院基本料区分 ・診療報酬の加算 等]
看護部の理念	施設において看護部門に期待される役割は何か 患者がどのような看護を求めているか どのような看護師を育成するのか 等 [・看護提供システム（チームナースング・プライマリナースング等）・看護部目標 等]
看護職員の構成	新人看護職員を教育するメンバーの経験年数や発達のレベルの層はどのくらいか 新人看護職員に求める役割の大きさはどのくらいか 等 新人看護職員が夜勤要員となる時期 等 [・看護職員数 ・看護職員数に対する新人看護職員数の構成割合 ・ラダー等による看護職員の発達段階や経験年数ごとの比率・夜勤体制・勤務体制 等]
新人看護職員を支援する体制	施設の支援体制で実施可能な知識・技術研修の内容、研修内容の工夫 指導者の育成状況 施設全体での教育体制・環境はどうか 等 [・組織体制（プリセプターシップ、・メンターシップ、・チューターシップ、・チーム支援型等） ・指導者教育体制 ・看護部の教育組織 等]
新人研修にかけられる時間・予算	提供する教育内容に対して到達目標の設定はどうか 施設の予算の範囲で提供できる教育体制の整備、教育プログラムの内容 等 [・研修時間 ・予算 等]
目指す看護職員像	一年目の目標と習得すべき知識・技術の内容 一年後にどのような看護職員をめざすのかビジョンはあるか 等 [・ラダー 等]

これらを考慮して、到達目標の「項目・詳細さ・難易度・到達時期」を施設に合わせて検討する

Y病院の例



施設の規模・機能

(例：救命救急センターを併設した高度急性期医療を担う病院)

※ここに示すイメージ図は、あくまでも一例であり、設定の流れや到達目標は施設毎に異なるものである。

施設の理念（医療目標）は？
地域における施設の役割は？

施設において看護部門に期待されている役割は何か？
患者がどのような看護を求めているのか？
どのような看護師を育成するのか？

看護部の理念

(例：根拠のある安全で安心な看護の提供
「ここでよかった」と思えるケアサービスの創造)

影響を与える要素

【看護職員の構成】例：
新卒40名(6%)、7月より夜勤予定

【新人看護職員を支援する体制】例：
プリセプターシップを軸にした屋根瓦支援、各部署に新人の数に応じたプリセプター(3年目)とサポーター(5年目)

【新人研修にかけられる時間・予算】例：
時間6月まで週1回、以降は月1回程度、年間200時間程度
予算約●万円(講師料、備品等)
*都道府県の補助金申請

目指す看護職員像

(例：「3年間で急性期看護のプロフェッショナルになる」)

施設に合わせた到達目標を検討

到達目標を設定

(例)

技術的側面： 看護技術についての到達目標	*GL 到達の 目安	考慮して検討	Y病院 の到達 の目安
救命救急処置技術		上記内容を 考慮して検討	
①意識レベルの把握	★Ⅰ	→	★Ⅰ
②気道確保	★Ⅱ		★Ⅱ
③人工呼吸	★Ⅱ		★Ⅱ
④閉鎖式心臓マッサージ	★Ⅱ		★Ⅱ
⑤気管挿管の準備と介助	★Ⅱ		★Ⅰ
⑥止血	★Ⅱ		★Ⅰ
⑦チームメンバーへの応援要請	★Ⅰ		★Ⅰ

*GL:新人看護職員研修ガイドライン

この例は、救命救急処置技術の項目『チームメンバーへの応援要請』に焦点をあて、おもに病棟で発生した急変・救命救急場面を想定し、施設の規模や機能に沿った技術的側面（看護技術項目）の設定を行う際の手順を示している。

①項目の設定例

救命救急処置技術の到達目標における項目の設定を行う場合を例として手順を示す。

到達目標の一覧を参考に項目を設定する場合（A病院）、施設の特性をふまえ、知識や理解を行動レベルで示すため、独自の項目を追加して設定する場合（B病院）などが考えられる。

①項目の設定例

A病院

B病院

救命救急処置技術	救命救急処置技術
①意識レベルの把握 ②気道確保 ③人工呼吸 ④閉鎖式心臓マッサージ ⑤気管挿管の準備と介助 ⑥止血 ⑦チームメンバーへの応援要請	①意識レベルの把握 ②チームメンバーへの応援要請 ③気道確保 ④人工呼吸 ⑤閉鎖式心臓マッサージ ⑥急変、救命救急時に必要な物品の準備 ⑦気管挿管の準備と介助 ⑧除細動器またはAEDの準備 ⑨人工呼吸器の準備 ⑩止血

②詳細さ(具体的行動レベル)の設定例: 「チームメンバーへの応援要請」

①で設定した項目ごとに詳細さを設定する。

急変、救命救急場面に必要な行動について各項目を最小限の行動で設定する場合(パターンⅠ)、やや詳細に設定する場合(パターンⅡ)、手順に沿って詳細に設定する場合(パターンⅢ)などが考えられる。

* 救命救急処置技術の場面には、患者の急変時と救命救急場面があることを想定し、どちらの場面にも対応可能となるよう記載している。

②詳細さ(具体的行動レベル)の設定例:「チームメンバーへの応援要請」

パターンⅠ	パターンⅡ	パターンⅢ
チームメンバーへの応援要請	チームメンバーへの応援要請	チームメンバーへの応援要請
1. 患者の急変時、救命救急時の行動を述べることができる。(応援要請方法・医師への連絡方法)	1. 患者の急変時、救命救急時の行動を述べることができる。(応援要請方法・医師への連絡方法)	1. 患者の急変時、救命救急時の行動を述べることができる。(応援要請方法・医師への連絡方法)
2. 救急カートの場所がわかる。	2. 患者の急変を発見したらそばを離れず、他のスタッフへ連絡できる(ナースコール・PHS等)	2. 患者の急変を発見したらそばを離れず、他のスタッフへ連絡できる。(ナースコール・PHS等)
	3. その場に応じた方法で医師へ連絡し応援を求めることができる。	3. その場に応じた方法で医師へ連絡し応援を求めることができる。
	4. 救急カートを準備できる。	4. 急変、救急場面時に対応した必要物品を準備できる。(救急カート・除細動器・AEDの点検・整備を含む)
		5. 急変、救命救急場面において、自分の役割を把握し、リーダーへ指示を求めることができる。
	3	6. 急変、救命救急場面に対応した記録ができる。 6

③病床規模や施設による難易度設定例： 「チームメンバーへの応援要請」

設定した項目の到達状況を判定するときの基準となる難易度を設定する。ここでは施設の規模や病床の特性などによる新人看護職員に求める役割の大きさによる難易度の例を示す。急変・救命救急場面に必要な役割を知識、技術を統合し判断する力、メンバーシップなどの管理的要素も含め示している。

③病床規模や施設による難易度設定例:「チームメンバーへの応援要請」

役割の大きさ

施設1	施設2	施設3
1. 患者の急変、救命救急の場面においてチームメンバーへ連絡ができる。	1. 患者の急変、救命救急の場面においてチームメンバーへ連絡ができる。	1. 患者の急変、救命救急の場面においてチームメンバーへ連絡ができる。
2. 救急カートを準備できる。	2. 必要に応じて医師へ連絡をし、応援を要請する。	2. 必要に応じて医師へ連絡をし、応援を要請する。(またはメンバーへ依頼する)
3. リーダーの指示に従い、他の患者の安全を守ることができる。	3. 救急カートを準備できる。	3. 患者の状態(意識レベル、呼吸・循環状態等)を他者に説明できる。
	4. 自分の役割を把握し、リーダーへ指示を求めることができる。	4. 急変、救命救急場面に対応した必要物品(救急カート、除細動器・モニター類)を準備できる。
		5. 急変、救命救急場面に対応した記録を経時的にできる。
		6. 基本的な救急救命技術を持ち、リーダーに指示を求め役割を果たすことができる。
		7. 救急カートの物品(内容、使用目的、使用方法等)について理解している。
		8. 除細動器・AEDの使用目的、使用方法等について理解している。

④到達時期の設定例:

「チームメンバーへの応援要請」

いつまでにその項目を到達するかの到達時期を設定する。

④到達時期の設定例:「チームメンバーへの応援要請」

○病院

△病院

- ・急変、救命救急場面において、自分の役割を把握し、リーダーへ指示を求めることができる。
- ・急変、救命救急場面に対応した記録ができる。

- ・救急カートの点検・整備ができる。
- ・除細動器・AEDの点検・整備ができる。

- ・急変、救命救急処置に対応した必要物品を準備できる。
(救急カート・除細動器等)

- ・その場に応じた方法で医師へ連絡し応援を求めることができる。
- ・救急カートを準備できる。

- ・患者の急変を発見したらそばを離れず、他のスタッフへ連絡できる。(ナースコール・PHS等)

- ・患者の急変、救命救急の場面においてチームメンバーへ連絡できる。
- ・救急カートを準備できる

期 間

基礎教育 新人1か月 3か月 6か月

1年